

---

# 彼女と彼。そして、わたし

Chiro

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼女と彼。そして、わたし

### 【Nコード】

N0277D

### 【作者名】

Chiro

### 【あらすじ】

高校一年の春、わたしは恋をしました。初恋でした。だけど…あなたには彼女がいました……

## 第一部 出会い（前書き）

この物語はフィクションです。  
人物名、団体名等は存在しません。

## 第一部 出会い

夢をみていました。  
いつかあなたが振り向いてくれると……

### 一話 初恋

「理奈<sup>リナ</sup>！一体いつまで寝てるつもり?!…ったく、同窓会、行くんでしょ？」

部屋の外、階段の下から聞こえる友人の声。  
寝ぼけたままの私の耳に、『同窓会』という文字が飛び込ん  
でくる。

それと同時に思い出すのは、あの記憶……。

高校卒業から今まで、誰にも言わなかった私の記憶を。

「理奈?!まだ寝てるの?!」

「はあい…今起きましたあ……」

私の意志と裏腹に蘇ろうとする記憶と…想いを、

思い切り頭を振って無理やりに消した。

数日前に私の家に届いた一枚のハガキ。

それは、『第63期生 3年2組 同窓会』と大きな見出しで書かれたものだった。

私には最初から行く気などなかった。

「…ねえ、綾香<sup>アヤカ</sup>…どうしても行かなきゃだめ……?」

布団を抜け出て、服を選びながら、玄関で待機している綾香に言う。

「当然。……あなた、まだ引きずってんの? ささっと忘れなさいよ」

綾香の呆れた声が返ってくる。

私は仕方なく、少し拗ねたふりをしながら階段を降りて玄関に向かった。

そして、玄関で仁王立ちして待っていた綾香に、半ば無理やり連れて行かれた。

同窓会の会場は、当時私たちが通っていた高校だった。

その高校に行くには、何本か電車を乗り継がなければならなくて、私たちはとりあえず駅に向かった。

駅までの道中、私と綾香は無言で歩いていた。

私は……また戻ってきそうなあの記憶を必死で押さえ込んでいた。気まずい空気の中で私は息が出来ず駅に着いた時、やっと、少しだけ息がつけた。

タイミングよく電車がホームに来ると、アナウンスが言った。

私は綾香に連れられて、ホームに着いた電車に乗り込む。

休日だったためか電車に乗っている人は少なく、

私たちは迷わず入ってすぐ前の空席に座った。

電車に揺られながら私は、抑え切れなかったあの記憶を、少しずつ思い出していた。

それはまるでビデオテープに録画された映像のように、鮮明で綺麗だった。

思い出したくない思い出が、私の頭の中で再生された。

## 一話 初恋 - 2

わたしがあなたに初めて逢ったのは、桜が舞い散る4月だった。

わたしはその日入学式で、式が終わり中学から一緒だった綾香と学校から帰る途中だった。

綾香と校門を出ようとしたとき、後ろで綾香の名前を呼ぶ声があった。わたし達は校門前で立ち止まり、声のする方を振り返った。

綾香を呼んでいたのは、わたし達より二つ上の綾香のお兄さん - 直人<sup>オト</sup> - だった。

向こうから綾香の名前を呼びながらわたし達のほうへ走ってくる。その後ろを走っていたもう一人の男の人が、……あなただった。

直人さんは、向こうから走ってきて少し息を切らしながらわたし達の前に座り込んだ。

「…何よ。そんなに大声で人の名前叫ばないでくれる？」

座り込んだ直人さんに、綾香は少し恥ずかしそうに言った。

「わりい、お前ら全然気付かねえし。ほら」

直人さんはそう言って、綾香に一枚の紙を手渡した。

綾香は不思議そうに、その紙を受け取って内容を読んだ。しばらくすると、綾香は顔を真っ赤にして、直人さんを睨んだ。

「じゃ、俺は渡したからなっ！」

その様子に気付いたらしい直人さんは、そう言って逃げるように戻っていった。

「は?! ちょっと……これ……、どおすんのよ……」

綾香の顔はますます赤くなった。

わたしは気になって綾香の持っていた紙を覗き込んだ。それはどうやら綾香宛の手紙らしかった。

「……? 綾香さんへ……。入学式の時……あなたに……一目ぼれしましたああ?! ……っんぐ」

それは綾香に宛てたラブレターだった。

思わず大きい声で叫んでしまったわたしの口を、綾香が慌ててふさいだ。

「……っ声!! でかいつ!!」

「ごめ……でも、これラブレター……だよね?」

確かめるようにそう聞くと、綾香は耳まで赤くした。

「あん……っの、馬鹿兄貴!!」

「……あ、ねえ綾香! これっ!」明日の放課後、桜の木の下で待つてる『って……」

わたしは綾香の手でくしゃくしゃにされた手紙を取ってもう一度、最後まで読んだ。

綾香は驚いたように「はっ?!」とだけ言って、少し考え込んだように後はなにも言わなかった。

「と、とりあえず……今日は帰るっ!」

少し拗ねたようにわたしの腕を引っばって、わたし達は学校を後にした。

綾香の頬は、少し赤く染まっていて、わたしは綾香に引っばられながら可愛いなあなんて思っていた。

## 初恋 - 3

もしかしたらあの人にとってわたしは、何でもないただの後輩だったのかもしれない。

だけど、わたしにとってあの人は、紛れもなく「初恋」の人でした……。

## 四月

入学式も終わり、あの人と初めて会ってから半月が過ぎた。

たまに頭をちらつくあの人に、自分が恋心を抱いているなんて、この時のわたしは気付きもしなかった。

ただ、なんとなく、名前も知らないあの人が、教室の前を通るたび、ドキンと鳴った自分の胸が、不思議で不思議で仕方なかった。

綾香にこの間のラブレターの事を聞くと、

「あんなやつ、振ったよ！！当然！

だってさ、一目ぼれなんて信じられるわけないでしょ！？

それに、あたし、あいつのこと名前だって知らなかったんだよ！？」

それなのにスキって言われても困る！！だって。

少し照れながらそう言った。

入学してしばらくたつと、綾香は部活に入った。  
そのせいか、帰宅部のわたしとは帰る時間が合わなくなって、  
一人で帰ることが多くなった。

その頃からあなたに、よく逢うようになりました。

『桜の木の下で落ちてくる桜の花びらを、  
地面に落ちるまでに左手でキャッチできれば、恋は実る。』

そんなおまじないが流行ったころ、わたしは馬鹿みたいに実践して  
た。

この日も、まるでそれが、帰る前の儀式のように当たり前  
落ちてくる花びらを追いかけていた。  
でも全然つかめなくて、私を素通りして落ちていく花びら。  
まるで神様に、『あきらめなさい』と言われているみたいで、  
余計にムキになって追いかけた。

「なに？またやってんの？懲りないねえ、君も。」

必死で花びらを追いかけてた私に、あの人は、突然話しかけてき  
ました。

まだ、あなたの名前も知らなかった頃です。

「…いいじゃないですか……ていうか、毎日毎日…一体なんなんですか？」

わたしは花びらを追いかけながらそう言った。

あなたは私がいる桜の木の下まで来て、ドカツと座りました。

「大城裕太、3年生。ねえ、なんでそんなに必死なの？好きな子いるの？」

あなたは座ったまま、花びらを追い掛け回すわたしを、目で追っていました。

わたしは立ち止まってあなたのほうを見た。

あなたのそんな態度に、わたしは思わずあなたを睨んだ。

「…あなたには関係ありません。」

あなたは、わたしのこんな態度に顔を歪めることもなく、笑って言いました。

「ふうん。ま、いいけど。じゃ、俺帰るわ！頑張ってね」

あなたは、わたしに大きくを振りしました。

それが、あなたの名前を知った日でした。

あなたは年上でした。

「……大城…先輩……」

わたしの目は何故か、あなたの後ろ姿を、ずっと追いかけていまし

た。

あの日、あなたにあんな態度をとったこと、今とても後悔しています。

だけど、その時はきつとあれが精一杯だった……。

わたしはあなたの前で笑ったことはありません。

あの頃わたしは何故か、あなたの前では笑ってはいけないと、そう思っていました…

## 初恋 - 4

あなたはまだ、わたしの名前を知りません。

わたしは、あなたに対して少しの意地を、張っていたのかもしれない……

その頃には、もう名前を言うことなんて出来ませんでした。

五月

桜が散り、あなたと初めて会ったあの樹は、薄いピンク色から、緑色に変わりました。

だけどわたしは、あれからずっと、放課後になればここで座っていません。

別に、あなたを待っていたわけではなかった。

ただ、綾香がそっけなくなっただけから、放課後はずっと、一人だったから。

今日も、わたしはここで座っていました。

いつの間にか寝ていたらしく、ふと、目を覚ますと、隣にあなたがいきました。

その時、隣で寝るあなたに戸惑う自分と、少し、嬉しいと思った自分がいたことに、

わたしは気付かないふりをした。

「……あ、おはよ。ごめん、俺も寝ちゃってた？」

あなたはすぐに目を覚まし、わたしに笑いかけました。  
わたしは、いつの間にかあなたに見とれていた自分に気づき、  
すぐに目を逸らしました。

「……………こんばんは。もう夕方ですよ。何やってんですか、こんなところ。」

わたしは立ち上がって服をはたいた。

「君こそ、こんなところで寝てたら風邪ひくよ」

あなたはわたしに向かって手を伸ばしました。

「……………なんですか？」

「起こして」

あなたは笑ってそう言いました。

わたしは仕方なくあなたの手を引きました。

「ありがとね」

あなたの手は、思ったより大きくて、ちゃんと男の人だった。

あなたは、わたしの名前を知っていますか……？  
いつになったら、聞いてくれますか……？  
いつになったら、呼んでくれますか……？

## 初恋 - 5

ある放課後、わたしはたまたまあなたの教室の前を通りました。

そこにはもう誰もいなくて、窓側の席にあなただけが、一人座っていました。

閉じた窓ガラスから夕日が差し込み、あなたをオレンジ色に染めていました。

少しうつむいたあなたの横顔に、わたしは見惚れていました。

あなたの表情を見れば、何かあったのだと、すぐに分かりました。

でも……何も聞けなかった。

あなたに声をかけることすら、あの頃のわたしには無理なことだった。

六月

じめじめとした空気の中、カタツムリが顔を出します。

季節は梅雨に入りました。

あなたに逢ったのは、もう何回目でしょう？

あの日は、雨が降っていました。

たまたま傘を忘れてきたわたしは、昇降口で雨が止むのを待っていました。

何分待っても、何十分待っても、簡単に止んでくれるはずもなく、あきらめて帰ろうとしたとき、後ろであなたの声がしました。

「あ、君……そこだなにしてるの？今日は雨だし……木の下で昼

寝は無理だと思つ。「

あなたは真つ黒い傘を開きながら、わたしの隣で立ち止まりました。

「それくらい、わかつてます。先輩こそ、もう下校時刻とつくに過ぎてますよ。」

あなたは苦笑しながら言いました。

「相変わらずだね。……傘、ないの？」

「……あります」

「ふう〜ん。じゃ、気を付けて帰ってね」

あなたは傘をさして校門を出てしまいました。

わたしは、しばらくそこから動けませんでした。

雨は酷くなる一方で、止む気配すらない。

しかたなく、そのまま帰ろうとしたとき、校門から誰かが走ってきました。

「…っ。ほらっ…、傘、無いんでしょ？」

黒い傘を差した、あなたでした。

わたしは声もでませんでした。

「どした？……なんか反応してよ……」

あなたは真つ黒い傘をさして、うつむくわたしの顔を覗き込みます。

「……馬鹿じゃないですか。そのまま帰ればよかったのに」

照れ隠しで言った言葉に、あなたの言葉はなく、ただ、笑っていました。

「ほら、帰るんだろ？送ってあげるから、入りな」

「……………ありがとうございます」

小さくつぶやいたわたしの言葉に、あなたはやっぱり笑ってくれました。

帰り道、わたし達は何も話しませんでした。

そして、やっぱり、あなたはわたしの名前を知らないまま、自分の家に帰っていきました。

わたしの胸の中に、なにかが、ちくりと刺さりました。

何も話さなくていい。

何も知らなくていい。

あなたが隣で笑っているなら、それで幸せ。

だけど、……わたしの名前、呼んでください。

あなたが呼んでくれないから。

わたしは『先輩』としか、…呼べないの。

今、あなたの名前を呼んでいるのは誰…？

愛しいと想いながら呼んでいるは、誰ですか……？



## 初恋 - 6

もうすぐ夏休みですね。

もうすぐあなたと逢えなくなります。

きっとあなたにはなんともない事でしょうね。

そのうち、あなたがつけてくれたあのあだ名も、  
忘れてしまつてしょ？

七月

露もあけ、じんじんと地面を、容赦なく太陽が照り付けます。

夏休み前の終業式の日。

わたしは、また、あなたに会いました。

「よお！これから帰るの？」

あれ以来、あなたはわたしを「桜ちゃん」と呼びました。

「そうですが。先輩もですか？」

何気なくそう答えると、あなたは驚いたように言いました。

「…え…なにか良いことでもあったの？反応がえらく素直だねえ」

「……特になにも。先輩こそ、顔がにやっけばなしですよ」

わたしがそう答えると、あなたはパツと顔を押さえ、恥ずかしそうに言いました。

「えっ！やっぱそんな顔してる？」

わたしの胸に不安がよぎりました。

「…彼女でも、できたんですか？」

あなたはさらりと答えました。

「できたらいいねえ。」

いやさ、明日から夏休みじゃん？もう、浮かれちゃって浮かれちゃって。

さっきもね、担任に『帰りに事故るなよ』って言われちゃってさあ……」

「……子どもですか。」

わたしは安心しました。今はいいんだ、と。

「では、わたしはこれで」

わたしは帰ろうと、校門に向かいました。

「え？ちょっと待ってよ。せっかくだから、一緒に帰ろうっ？ね。」

「…は？なんで」

「いいじゃん。なんとなくだよお」

「…そんなことしてると、誤解されちゃいますよ」

「ま、いいんじゃない？さ、帰ろうー！」

わたしの胸の中で、何かが、崩れる音がしました。

ねえ、先輩。

わたしをからかっているんですか？

だったら、お願いします。

わたしに構わないで

わたしに笑わないで

わたしに触れないで。

ねえ、先輩。

わたしはあなたに笑いませんよ？

だから、お願い。

そんな風に、笑わないでください…。



## 初恋 - 7

先輩の目は、何処を向いていますか？

わたしと話しているときも、

違う場所を見えていますよね。

先輩はどうして、そんな風に笑うんですか？

悲しいから？泣きたいから？

先輩の笑顔は、いつも寂しそうです。

わたしが、先輩を笑わせることができたら

わたしが、先輩をわらわせることができるなら…

そんなことばかり考えているは、

どうしてですか……？

八月の夏休み。

あなたには、一度も会いませんでした。

わたしは家族と出かける以外、どこにも行かなかつたし、  
行ったとしても、コンビニくらいでしたから。

夏休み中、ずっと、わたしの胸の中は、あなたでいっぱいでした。

そして、夏休みあなたへの想いに気付きました。

恥ずかしくて、照れくさくて、……とても今更で……  
わたしの名前を知らないあなたに、  
わたしは勝手に恋をしていました。

九月

夏休みが終わり、もう、台風の時期です。

制服も衣替えし、半そでから長袖に変わりました。

そして、あなたに出逢ってから、半年以上たちました。

あなたが卒業するまでに、わたしはあなたに伝えようと思います。

けれど、なぜか、胸の中の不安が消えません。

あなたとすれ違ったびに、ちくりと胸が痛むのです。

理由もなにも解らないまま、もうすぐ、十月に入ろうとしています。

先輩は、今、好きな人はいますか？

あの時、いないよと言っていたけど、

あの言葉は本当ですか？

だったら、先輩に想いを告げてもいいですよね。

伝えるだけなら、許されますよね。

先輩、わたしの名前は……

## 初恋 - 8

先輩、何かあったんですか？

どうして何も言ってくれないんですか？

私じゃ何の力にもなりませんか？

このままそっとしておくことが、

今の私に出来る唯一のことなんですか…？

十月

今年も台風が沢山通り過ぎていきました。

暑さから肌寒さに変わり、制服もまた、夏服から冬服に変わりました。

あなたとの関係は相変わらずです。

けれど、最近、あなたの様子がおかしいのです。

笑っていても、どこか悲しんでいるようで、

話していても上の空だったり。

どうしたんですか、と聞いてみても、あなたは何も答えてくれません。

静かに笑ってなんでもないよ、と言うだけです。

それと同時に、これ以上何も聞くなと言われたようで…。

先輩の様子は変わらないまま、十月が終わりました。

何も出来ない私は、とても無力で

役立たずで、だけど、どうしていいかわからなかった…。

十一月

放課後、あなたと帰るのが日課になってきました。

けれど、やはり、帰り道は何も話しません。

あなたの様子もおかしいままです。

私に対してはずっと笑顔の先輩が、寂しくて、悲しくて、

何も出来ない私が、ただ無力で、馬鹿みたいで、

先輩が笑ったたびに泣きたくなります。

「よ！待っててくれたんだ」

昇降口で座ってるわたしに、あなたが声をかけてくれました。

「…いえ。座っていただけです」

「そっか。よし、じゃ、帰ろう」

あなたはわたしの手を引っぱって、校門を出ます。

「……………最近、噂になってますよ」

「ん？」

先輩はとぼけた顔でわたしを見ます。

「わたしと先輩のことです。どうするんですか？付き合ってもないのに…」

わたしは、あなたの反応に何かを期待していたのでしょうか。

「…そだね。ま、いいんじゃない？人の噂も七十五日って言うしね」

あなたは否定もしなければ、肯定もしませんでした。

あなたと帰るたびに、わたしの胸の中で、何かが音を立てて崩れていく…

なにかとてつもない不安に襲われて、

わたしの胸はずっと、ざわついたままでした。

わたしに何も出来なることがないのなら、

せめて先輩が泣けるように

せめて先輩が笑っていられるように、

あなたのそばにいたい と

想うことは、迷惑ですか…？

振り向いてくれないとわかっていても

わたしに笑ってくれるなら

そばにいたい と

自惚れてしまいたい と

想うことは、迷惑ですか……？

## 初恋 - 9

もうすぐ卒業ですね。

先輩は受験で忙しそうです。

受験が終わってから、

帰り道ではとても不安そうに、入試の事を話してくれました。

先輩が卒業したら、

この日記も、もう、書かなくなるのかな？

読み返してみたら、先輩のことばかりで、

馬鹿みたいだな、なんて笑ってしまいます。

先輩、先輩が卒業したら、この日記はおしまいにしますね。

十二月

あなたは無事に、大学に受かったようでした。

放課後の帰り道、わたしに報告をしたあなたは、とても嬉しそうでした。

「どうしてわたしに言うんですか？」

わたしはあなたの反応に、少しの期待を抱きました。

「……………さあね」

あなたは、淋しそうに笑いました。  
そしてまた、胸がちくりと痛みました。  
もうすぐ、冬休みに入ります。  
また、あなたに会えなくなりません。  
その間、わたしはどうやって過ごして行きましょう？  
そう考えると、また、胸がざわつきました。

十二月二十四日

冬休み二日目です。

友達の家でクリスマスパーティーをすると言っているので、  
わたしは今、友達の家に向かっています。  
今、あなたはどうしているのでしょうか？

家でケーキを食べてますか？  
友達とパーティーですか？

街はすっかりクリスマススムードです。  
恋人たちが幸せそうに歩いています。

その時……わたしの胸が、前よりもっと、ざわつきました。  
わたしの目の前を、あなたと、一人の女の人が歩いていました。  
その人に見せるあなたの笑顔は、わたしの前で笑ったときより、  
すごく幸せそうでした。

わたしは思わず、走りました。

あなたに気付かれないうちに、早くその場から逃げたくて…  
わたしは、友達の家に行かず、そのまま自宅に帰りました。  
不思議と涙は出ませんでした。

…胸のざわつきの原因が、一気にわかったようでした。

あの時、彼女がいると、どうして言ってくれなかったの？  
わたしなんて眼中に無いからですか？

先輩には、わたしなんて見えていないからですか？

ねえ、先輩？

わたしは、どうしたらいいですか？

涙は出ません。

その夜、目に焼きついたあなたの笑顔と、

隣で笑う女の人の笑顔が、わたしの頭を離れなかった。

わたしの気持ちだけ置き去りにして、

冬休みが終わります。

## 初恋 - 10

年が明けました。

先輩はどんな大晦日を過ごしましたか？

家族と過ごしましたか？

それとも彼女とですか？

年越しそばは食べましたか？

初詣には行きましたか？

わたしは、見事に大凶でしたよ。

先輩は……きっと大吉ですね。

先輩、合格おめでとうございます。

直接言えなかったけれど、今はまだ素直になれないけれど  
せめて、日記の中では言いたかった。

もう、あなたとは会わないことにします。

一月

もうすぐ、卒業式です。

あれからあなたとは一度も会っていません。

あなたの教室の前を通らないように、まわり道で昇降口に向かい、  
あなたが来る前に帰ります。

今、あなたに会えば、何もかもが崩れてしまいそうで、怖かった…  
わたしなんか、本気で相手をするわけがなかった。

あなたには、好きな人がいた。

クリスマススイア

二十四日を一緒に過ごすような人が。

卒業までに伝えようと思っていたけれど、

わたしはやめることにした。

今年は、先輩にとって最高の一年になりますように。

二月

3年は午前授業が多くなり、時には誰も来ない日もあった。  
これで、あなたに会わなくてすむ。

わたしは、時期を遅れて降っている雪を眺めながら、  
少しだけ泣きそうになった。

「久しぶりだねえ。『桜ちゃん』」

わたしの背後で、あなたの声がしました。

「なんで先に帰ってたの？俺待ってたのに……」

どうして、どうして…あなたがそんなことばかり言ってるから、  
だから、わたしみたいなのが付け上がるんですよ…

「なに言ってるんですか。先輩はもうすぐ卒業ですよ。そろそろ一人  
で帰らないと……」

わたしは何も知らないことにした。

彼女のこと、わたしがあなたに恋をしていることも。

全部に、知らないフリをした。

「まあ、そうなんだけどね。…相変わらず、きついね」

あなたは苦笑して言った。

ざわついたままの胸を抑えて、何も語らない帰り道、  
ずっと終わらなければいいのに…

そう思いながらあなたと帰った。

会わないと決めたのに

もう、忘れようと決めたのに

あなたに会えば、

会ってしまえば、

叫んでしまいそうになるわたしは

勝手ですか？

わがままですか？

そのままわたしだけに笑ってくれたら と

願うのは、勝つてですか？

名前を叫びたいのに、

名前を呼んで欲しいのに、

いつまでたつても呼んでくれなかったのは、

わたしが先輩にとって「対象外」だからですか？

先輩に会うたびに、どういいのかわからなくなります。

先輩は笑ってくれるのに

わたしは笑わなくて

先輩は待っていてくれるのに

わたしは待たなくて。

いつまでも素直になれなかったわたしへの  
はやく想いを告げなかったわたしへの  
報復ですか……………？

来月には、あなたの姿はありません。

## 初恋 - 11

先輩に初めて会った日から  
もうすぐ一年が経ちます。

色々なことがありましたね。

教室で先輩が物憂げな顔をしていたとき  
わたしは見とれてしまいました。

男の人に、とても綺麗だ と  
感じてしまいました。

傘を忘れて、昇降口で立っていたとき  
その時点で先輩には分かってたんですね。  
傘を持ってきてなかったこと。

その日から、一緒に帰るようになりました。  
もしかしたら、この辺りから

わたしは自惚れていたのかもしれない。

どれだけ憎まれ口をたたいても、

どれだけ素直にならなくても、

あなたは笑ってくれました。

先輩は、わたしの全てを見透かしてるみたいに思えた。

小さい声で言った「ありがとう」に

反応して笑ってくれたときも

素直になれないわたしに

「きついね」と笑ってくれる。

とても とても

とても 優しいね。

三月

卒業式。

わたしは1年だから参加しない。

二月に会ったあの日以来、一度も会わずに、あなたは卒業してしま  
った。

授業中、ざわつく校庭を窓から覗くと、

あなたと、あの日見た女の人が嬉しそうに笑ってた。

心なしか、先輩の目が赤く見えた。

…泣いたのかな。

先輩でも泣くんだ。

ざわつく胸を抑えながら、わたしは黒板に目を向けた。

結局、あなたはわたしの名前を知らないまま、

わたしの前からいなくなりました…。

とても

とても

すごく優しい先輩に

最後に意地悪くらいすればよかった。

困らせてしまえばよかった。

もう、日記にも書けない言葉だけねど

先輩にも、誰にも言えない言葉だけれど  
すごく優しい先輩あなたに  
最後に意地悪くらいすればよかった。

先輩、卒業、おめでとうございませう。  
そして、さようなら。

## 初恋 - 12

高校時代のわたしの日記。

そういえばこんなこと書いてたっけ。

ああ、こっちに来たときに読み返したんだっただろう。

どうしてこんなことばかり覚えてるんだらう。

全部忘れたつもりだったのに。

ねえ、理奈？

会えなくなってから、もう十年経つんだよ？

どうして、まだ、忘れられないの………？

「ちょっと理奈？あんた起きてる？」

親友の声で目が覚めた。

どうやら電車の中で、寝こけてたらしい。

「……やな夢。」

「ん？何？」

「何でもない……」

あれから10年経つけど、未だに胸の中のざわつきが治まらない。  
先輩は…今、どうしてるだろう？

「ほら、降りるよ！…いつまでそんな顔してるつもり？  
あの人が来るわけないでしょ、先輩なんだから」

綾香に腕を引っぱられて、電車を降りた。  
久しぶりの駅。

わたしは高校を卒業してから、今の家に引越した。  
だから、卒業してからは一度も来ていない。

「…懐かしいね」

思わずそんなことを口にした。

「でしょ。みんな元気かな？」

綾香はホツとしたように笑って見せた。

高校に近付くにつれて、だんだん胸が痛くなってくる。  
いろんなこと思い出して、ちくりちくりと胸が痛む。

「ほら、ついたよ！」

高校の正門の前に来ると、綾香がわたしの背中をたたいた。

「痛…っ…。もう、何？」

「ごめんごめん、ほら、着いたよ」

見上げると、そこには見慣れた、懐かしい風景があった。

「……………うん」

胸が高鳴る。

来るわけない、先輩の面影を追いながら、  
7年ぶりに正門をくぐった。

一話 初恋 終わり

## 二話 再会 - 1

わたしたちは、3 - 2の教室に向かった。

そこまで行くのに通る、懐かしい教室。

職員室、1年の教室、階段を上がって、生物室、書道室…。

…先輩のいた教室。

ふいに、その教室の前で立ち止まったわたしの腕を、綾香が引っぱ  
つてくれた。

「…行くよ」

「うん」

3 - 2。

教室に着いた。

ドアの前に立ったわたし達は、少しためらいがちに、

少し懐かしさを感じ、二人で扉を開けた。

すでに何人かが来ていた。

「おお！久しぶりだなあ！！お前ら！！」

扉を開けると、一人の男性が嬉しそうに近付いてきた。

「おう！！久しぶり！！」

綾香はなんのためらいもなく、その人とハイタッチ。

この男性は、高野広司。高校時代の綾香の恋人。

卒業してからは、お互い忙しくて、逢えなくなっただから別れたらしい。

それにしても…さすが綾香だ。あっという間に囲まれた。わたしは教室を見回して、窓の方に向かった。道路側の窓からは、登下校の生徒が良く見える。そつえば…よくここから見てたっけ…先輩のこと。

「理奈。またなんか考え込んでるでしょ」

背中からした綾香の声で我に返る。

「…ん。ごめん」

「……………べつに謝ることじゃないよ。」

綾香はわたしの隣に立った。

「…まだ、ふっ切れてないんだ？」

「……………わかんない」

綾香はうつすらと笑みを浮かべた。

「…仕方ないか…」

「わたし、ちょっとトイレ…行ってくるね」

綾香にそう言って、わたしはあの場所に行った。

先輩の教室…覗く勇氣はなくて、目を逸らした。

書道室を通りすぎ、生物室、階段を降りて1年の教室の前を通る。職員室を通りすぎ、昇降口を出ると、斜め左に見えるは校門。

その前に立つ大きな桜の木。  
あの頃から何も変わらずに咲き続けている一本の桜。  
わたしはその木の根元に腰を下ろした。

卒業して何年目の春が過ぎた？

今年もこの桜は変わらずに咲くのに、先輩はもういなくて……

桜の下で、こうして座っていれば、また、会えると思った。

先輩が卒業した後も、昼休みにはここで座ってた。

雨が降った放課後は昇降口で座って、雨が止むまで待っていた。  
先輩のいない2年間は、とても長かった。

毎日が長くて、先輩がいないことが、こんなにも苦痛だった。

空を見上げると

桜の花びらのスキマから覗く、綺麗で青い空。  
目を閉じると、鮮明によみがえるあなたの笑顔。

今、先輩はどうしていますか

何をしていますか

先輩の心の中に、あの日のわたしは

いますか……？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0277d/>

---

彼女と彼。そして、わたし

2010年10月27日02時14分発行